



英語学習者による会話における構文の響鳴とその拡張

木原, 恵美子

(Citation)

日本認知言語学会論文集, 24:185-192

(Issue Date)

2024-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496548>



英語学習者による会話における構文の響鳴とその拡張

木原恵美子（神戸大学）

1. はじめに

本研究は、Goldberg (2019) で示された用法基盤主義の構文論の観点に基づいて、EFL 学習者の会話データを分析し、学習者による会話中の構文の学習と運用について考察する。このたびは、CEFR B1 レベルと B2 レベルの英語学習者である大学生 3 名により実施されたオンラインミーティング（4 ヶ月間、7 回実施、10 時間 19 分）中に使用された繰り返し（*repetition*）に注目したところ、会話の参加者の参加態度（*engagement*, Goodwin 1981, Tantucci and Wang 2022）が高い時に構文が高頻度で響鳴（Du Bois 2014）し、さらに響鳴した表現をもとに新しい用法が拡張して使用され、その拡張された用法が参加者の間で繰り返し使用されたことが観察された。この会話データより、EFL 学習者による繰り返し（*repetition*）の生産性には、まず同一参加者との会話の積み重ね（*interactional history*, Deppermann 2018）が必要で、そのような積み重ねがある上で、全話者の参加態度が高い時に繰り返しの生産性が上がる可能性が示唆された。Goldberg (2019: 73) では「ある構文が様々な拡張例で使用されるのを経験すると、その構文はさらに生産的に使用される傾向がある」と述べられるが、本研究の 4 ヶ月にわたる縦断的な会話データより、大学生の英語学習者の場合、会話時間の蓄積が初対面から 9 時間程度あれば、その会話中に話者が構文を経験して、新しい用法を生み出せることが明らかになった。

2. 会話における響鳴

本研究では EFL 英語学習者の会話における構文を分析するにあたり、響鳴（*resonance*, Du Bois, 2014）の概念に基づいて、響鳴表現に着目する。響鳴とは、意図、状況、スタンスの差などを反映して、繰り返し、変形、代入、言い換えなどによって実現されるものである（崎田 2013: 559）。たとえば (1) では、名詞 *drama* が 2 人の話者により繰り返し使用されているだけでなく、*there* 構文も同一話者 (Jill) により 5 回繰り返し使用されている。（JILL の発話 1 における *drama* や発話 5 の *there was* はプライミングと呼ばれる。）

(1) (*Hey Cutie Pie* SBC028: 70.075-80.730)

- 1 JILL; You ^missed like all the ^drama here.
- 2 (H)
- 3 JEFF; ^No drama.
- 4 JILL; ^Yeah,
- 5 there was ^such ^drama.
- 6 There was ^drama,
- 7 and there was ^suspense.
- 8 (H) And then there was ^relief,
- 9 (H) and then there was ^ecstasy. (Du Bois 2014: 371)

(1) では語レベルの響鳴と構文レベルの響鳴がみられるが、他にも指示響鳴、語用論的な響鳴などがあり、響鳴は会話中に広く観察される。特に、響鳴のなかでも繰り返しには、(2) のように語末のイントネーションが上昇する繰り返し (repetition with upward intonation) と、(3) のように語末が下降する繰り返し (repetition with downward intonation) がある。

- (2) 01 A: No, I mean on Saturday maybe we can do it.
 02 C: Saturday? Wow. Mmmm. (木原 2022b)
- (3) 01 A: But you are familiar with that piano.
 02 C: Am... just familiar, I cannot still play it. (木原 2022b)

(2) は驚きや興味といった感情的スタンスを表す (Svennevig 2004) ことが多く、(3) は同意 (agreement)、承認 (acknowledgement)、確認 (confirmation tokens) を表す (Schegloff 1996) ことが多い。本研究では、(2) や (3) のような語句レベルの繰り返しに注目して会話データを分析する。

3. データ分析

本研究で分析する EFL 英語学習者による会話データは、日本人大学生 1 名 (CEFR B1 レベルの話者 J) と台湾人大学生 2 名 (CEFR B1 レベルの話者 T1 と CEFR B2 レベルの話者 T2) によって 4 ヶ月にわたって実施された縦断的なオンライン会話 (7 回、合計 10 時間 19 分) である。7 回のオンラインミーティングの総ターン数と(2)-(3)のような語の繰り返しがみられたターン数をまとめたものが表 1 である。

表 1. 各ミーティングにおける総ターン数と繰り返し数の割合

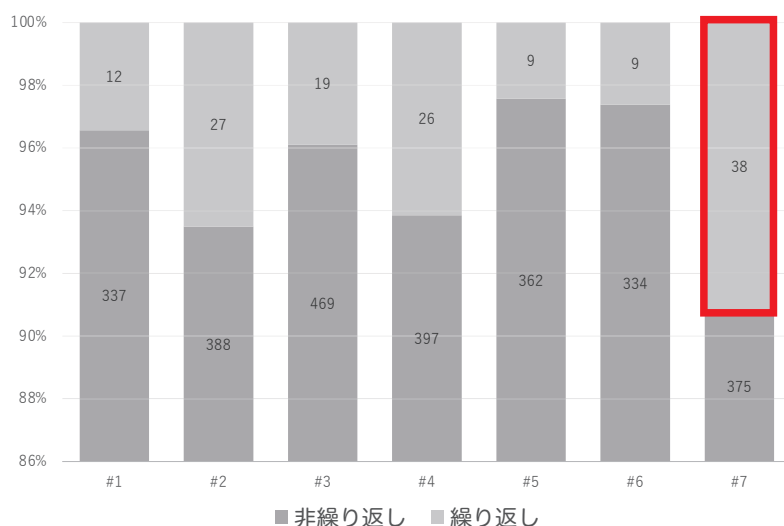


表 7 より、7 回目のミーティング (83 分 55 秒) で語句レベルの繰り返しの頻度が最も高くなったことがわかる。この 7 回目のミーティング中の繰り返しを精査した結果、全話者が語句を単純に繰り返すことが多かっただけでなく、「語を繰り返した後に、その後を理解できない場合は、その語についてスマホやノートパソコンで検索する」という新しい形式が生まれ、その新しい形式がさ

らに拡張して5回繰り返されたことが明らかになった。

具体的には、7回目の会話の冒頭（開始1分43秒）でまず以下のやりとりが観察された。

- (4) 01 J: So he is, he is a rookie. Wizards. Do you know?
02 T2: Wizards.
03 J: Washington, Washington Wizards.
04 T2: Washington? Wait a moment. [internet search (smartphone)] 
Oh, okay, okay.
05 T1: Oh, yeah.

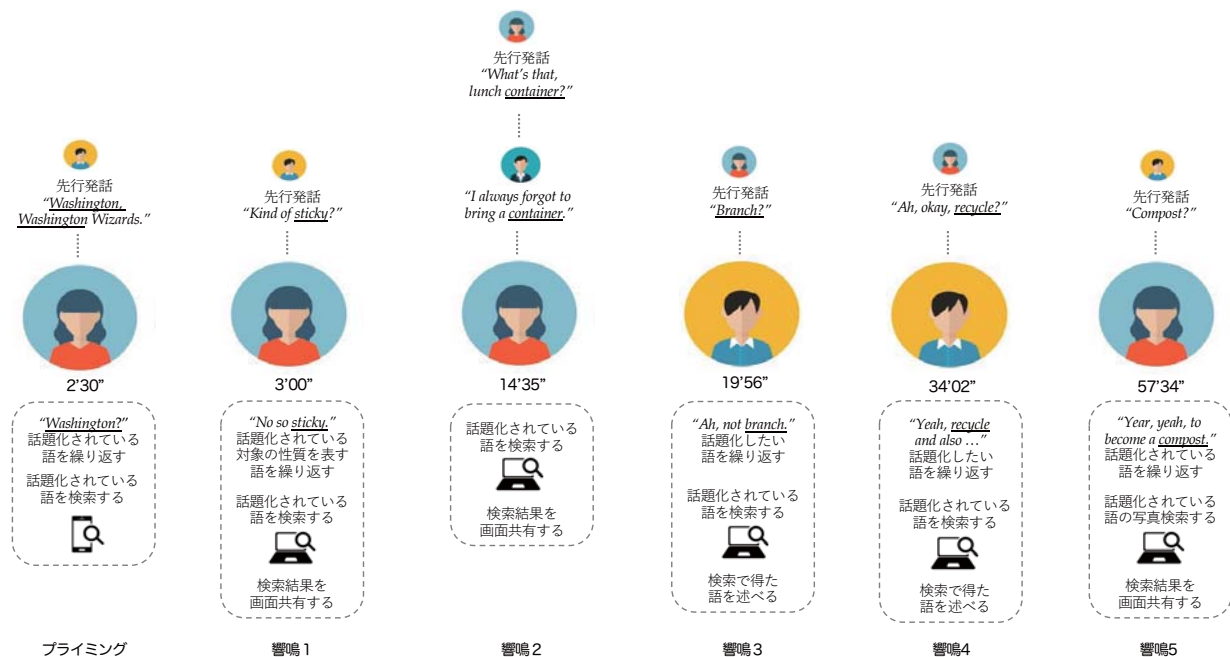
(4) では、①話者 T2 の知らない語 (Wizards) が話者 J により述べられる [発話 01]、②話者 T2 がその知らない語 (Wizards) を単純に繰り返す [発話 02]、③話者 J が補足説明する語 (Washington) を追加して再度 Wizards を繰り返す [発話 03]、④話者 T2 は先行発話で補足された Washington を上昇調で繰り返し、自身の疑問を解決するために自らスマートフォンを用いてインターネット検索を行い、自身で自己修復 (repair) する [発話 04]、という連鎖 (sequence) が観察された。話者 T2 はまずは自身が理解できない語を繰り返し、その語をインターネット検索して、自身の不理解を自己修復したのである。この構造は (2) や (3) のような単純な繰り返しとは異なる。話者 T2 は (2) や (3) のようなパターンから新しい用法（語を繰り返す－検索－自己修復）を拡張させたといえるだろう。

興味深いことに、この一連のやり取り（先行発話でとりあげられた語を理解できない時、まずその語を繰り返し、それからインターネットで検索して、自身の不理解を修復する）がプライミングとなり、その後の会話で類似連鎖が5回観察された。

- (5) 01 T2: It's a ball. Small Ball. Like we have some special, okay.
02 J: Kind of sticky?
03 T2: No. Not so sticky. I think. [internet search (laptop)] 
So you can see our screen.
- (6) 01 T2: How about you can bring some, ah, what's that, róng qì, lunch container?
02 T1: Yeah, I always forgot to bring a container.
03 T2: Because nowadays we have, [internet search (laptop)] 
I think, we have ... we have this. Did you know this?
- (7) 01 J: Some chopsticks are made from, ah, ah, how can I say, kind of waste of wood.
So when you cut cut a tree, at that time, some branch, branch?
02 T2: Branch?
03 J: Ah, not branch. Just a moment. [internet search (laptop)] 
- (8) 01 T2: Ah, not throw away a plastic bottle?

- 02 J: Yeah, yeah. Of course, yeah. Right, and also...
- 03 T2: Reuse the bottle?
- 04 J: Just a moment. [internet search (laptop)] 
A kind of soaking garbage completely.
- 05 T2: Soaking? Ah, okay. Recycle?
- 06 J: Yeah, recycle and also ... [internet search (laptop)] 
A-, not, not an, non-littering?
- 07 T1: Litter?
- (9) 01 T2: During last semester, in our class, our teacher asked us to do it, a kitchen waste can, and we.... Oh, I can show you a picture. And then he asked us to, to grow some vegetables around the kitchen waste can. We used kitchen waste to become the ...
- 02 J: Compost?
- 03 T2: Yeah, yeah, to become a compost. So I did it. To become a compost. I did it last semester. And I can show you the picture. [searching in laptop] 

図 1. プライミングと 4 つの響鳴



まず(5)では、話者 T2 が話題化されているモノ（団子）の英語の名称がわからないため、そのモノの性質 (sticky) を繰り返し、それから話題化されているモノ（団子）についてノートパソコンで検索した。(6)では、再び話者 T2 が話題化されているモノ（róng qì, 容器）の英語の名称がわからず、不確かな状態で lunch container と述べ、話者 T1 によっても container と繰り返され、それから

話者 T2 は *lunch container* についてノートパソコンで検索している。(7)と(8)では、話者 J が自身が話題化したい英単語がわからないため、その語に近い語である *branch* や *recycle* を繰り返し、それからノートパソコンで検索している。(9)では、話者 T2 が言葉に詰まったため、話者 J が *compost* と述べて他者修復し、その修復後に話者 T2 が *compost* と 2 回繰り返し、自身のノートパソコンの中に保存されている写真を画面共有した。(5)-(9)を個別にみると、図 1 のように、先行発話がプライミングになり、直後の発話で使用された語と同じ語を繰り返した話者 T2 と話者 J が語レベルの響鳴を行ったといえるだろう。しかし、(5)-(9)を連鎖として見ると、(4)の連鎖がプライミングとなり、(5)-(9)では構成要素の一部が拡張しつつも、語だけではなく [話題化されている語をデジタル機器を使って検索する] という行為も響鳴していることがわかる。

4. 考察

(4)-(9)の「先行発話でとりあげられた語を理解できない時、まずその語を繰り返し、それからインターネットで検索して、自身の不理解を修復する」という連鎖を構文とみなせるかどうか、「インターネットで語を調べる」という行為も構文の構成要素とみなせるかどうかという点であるが、もちろん検索行為自体は *grammatical form* でも *syntactic form* でもない。しかし、先行発話で生じた語を繰り返してから、その語をインターネット検索するという一連の連鎖を構文とみなすことは可能だろう。

- (10) “Any linguistic pattern is recognized as a construction as long as some aspect of its form or function is not strictly predictable from its component parts or from other constructions recognized to exist. In addition, patterns are stored as constructions even if they are fully predictable as stored as constructions even if they are fully predictable as long as they occur with sufficient frequency.”
(Goldberg 2006: 5)

(10)のとおり、これまで構文分析の対象は *linguistic pattern* に限られてきた。しかしながら、(4)-(9)のように、ある *linguistic form* と共起する行為も含めて *pattern (form)* とみなし、その *pattern (form)* 全体を構文 (*pairings of form-meaning*) として、学習者の会話ではみなしてもよいのではないかと考える。Goldberg (2019: 73) で「ある構文が様々な拡張例で使われるのを経験すると、その構文はさらに生産的に使用される傾向がある」と述べられているとおり、行為も含む連鎖が一部拡張しながら繰り返されたということは、話者 T2 と話者 J にとっては(4)-(9)の連鎖も構文といえるだろう。そして、この構文の生産性を支えたのが同一参加者によるこれまでの *interactional history* (Deppermann 2018) であると考えられる。(ただし、この点は母語話者の構文の使用とは異なる可能性があるため、同じことが母語話者の構文使用にもいえるかどうかは今後もデータを収集して検証する必要がある。)

また、今回とりあげている会話データの中に、(4)-(9)以外にも、語は繰り返されないが、[話題化されている語をノートパソコンで検索する] という行為が全話者により計 8 回観察された。デジタル機器を使って語を検索するという行為の生産性が高いのは、その行為もコミュニケーション

ン効率が高い linguistic pattern と同等であると会話の参加者がみなして繰り返したと考えられる。これは「種類も語数も多い構文よりも、種類も語数も少ない構文の方が学習も産出も容易である」(Goldberg 2019)に通じる現象で、語数はゼロであるが種類は1つしかない検索行為を学習者が何度も産出したと考えられる。

4. むすび

本研究では、学習者の会話データを用法基盤主義の構文論の観点から考察した。その結果、①響鳴が高頻度で観察された時に新しい響鳴パターンが生まれたことが確認され、②学習者の構文には行為も含まれる可能性があることがわかった。このように、学習者の会話中の構文にも用法基盤主義の構文論の観点からアプローチすることで、学習者の構文の運用実態を少しずつ解明していくことができるだろう。もちろん、Goldberg (2019) で示された構文の全特性が学習者の話し言葉における構文にそのまま適用できるかどうかは引き続き検証していく必要があるが、EFL 学習者の構文にも母語話者の構文と類似の特徴がみられることが本研究データより示されただろう。

参考文献

- Deppermann, Arnulf. (2018) "Changes in Turn-Design over Interactional Histories-The Case of Instructions in Driving School Lessons." In Arnulf Deppermann and Jürgen Streeck (Eds.), *Time in Embodied Interaction: Synchronicity and Sequentiality of Multimodal Resources*, pp. 293-324. Amsterdam: John Benjamins.
- Du Bois, John W. (2014) "Towards a Dialogic Syntax." *Cognitive Linguistics* 25(3): 359-410.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford University Press.
- Goldberg, Adele E. (2019) *Explain Me This: Creativity, Competition, and the Partial Productivity of Constructions*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Goodwin, Charles. (1981) *Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers*. New York: Academic Press.
- Hernandez, Alexia, Sammy Floyd, and Adele. E. Goldberg. (2019) "Productivity Depends on Communicative Intention and Accessibility, Not Thresholds." *Proceedings of the 41st Annual Meeting of the Cognitive Science Society*.
- 木原恵美子 (2022a) 『認知統語論 (認知日本語学講座第3巻)』山梨正明・吉村公宏・堀江薫・靱山洋介 (編) (第2章) くろしお出版
- 木原恵美子 (2022b) 「L2 英語学習者による3人会話にみられる繰り返し」日本認知言語学会論文集 22: 426-431.
- 木原恵美子 (2023) 「中上級英語学習者による3人会話における響鳴」日本語用論学会第26回全国大会配布資料.
- 崎田智子 (2013) 「対話における発話の創発—認知と対話のインターフェース」児玉一宏・小山哲春 (編) 『言語の創発と身体性—山梨正明教授退官記念論文集』pp. 547-562. ひつじ書房.

- Schegloff, Emanuel. (1996). "Issues of Relevance for Discourse Analysis: Contingency in Action, Interaction, and Co-Participant Context." In Eduard H. Hovy and Donia R. Scott (Eds.), *Computational and Conversational Discourse: Burning Issues—an Interdisciplinary Account*, pp.3-38. Heidelberg: Springer.
- Svennevig, Jan. (2004). "Other-repetition as Display of Hearing, Understanding and Emotional Stance." *Discourse Studies* 6: 489-516.
- Tantucci, Vittorio and Aiqing Wang (2022) "Resonance as an Applied Predictor of Cross-Cultural Interaction: Constructional Priming in Mandarin and American English Interaction." *Applied Linguistics* 43(1): 115-146.
- Young, Richard F. (2011) "Interactional Competence in Language Learning, Teaching, and Testing." *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning* 2, pp. 426-443. London: Routledge.

[Abstract]

Lexical Resonance and its Extensions in Conversations by EFL Learners

Kihara, Emiko

Kobe University

This study explores the acquisition and application of constructions by English as a Foreign Language (EFL) learners in conversational data, employing a framework rooted in usage-based constructionist approaches (Goldberg 2019). Specifically, the research centers on lexical repetition during online meetings involving three university students at CEFR B1 and B2 levels over a four-month period (7 sessions, totaling 10 hours and 19 minutes). The findings reveal that lexical resonance occurred more frequently during moments of heightened participant engagement (Goodwin 1981, Tantucci and Wang 2022). Additionally, expressions that resonated were extended into new usages by the participants during these highly-engaged interactions. From this conversational data, it is inferred that the productivity of lexical repetition in EFL learners is contingent on the accumulation of conversational interactions with the same participants (interactional history, Deppermann 2018). Building upon Goldberg's perspective (2019: 73) that "if they have already witnessed a construction being extended with a wide variety of exemplars, they are more willing to use it productively themselves," this longitudinal data indicates that, with approximately 9 hours of accumulated conversation time, EFL learners can create new usages accompanied by lexical resonance in their conversations.